

複合型福祉施設の異なる属性間での交流実態と 建築設計・施設運営との関わりに関する考察 - 「輪島 KABULET」プロジェクトを事例として -

A Study on the Relationship between the actual condition of interaction
between Different Attributes of Complex Welfare Facilities and
Architectural Design and Facility Management
- A Case Study of the "Wajima KABULET" Project -

○笠川睦^{*1}, 山崎寿一^{*2}, 山口秀文^{*3}

KASAKAWA Mutsumi, YAMAZAKI Juichi, YAMAGUCHI Hidefumi

The Wajima KABULET is a vacant lot/vacant house renovated in 2018 in the Kawai area of Wajima City. By deploying multiple services such as the self-government room, it has become a facility where everyone in the area can gather. This research organizes people with various attributes gathered in Wajima KABULET, and among them, there are two points: the interaction between users and the interaction between users and facility operators. The purpose is to analyze the characteristics from the viewpoint of architectural design and facility management to cause interaction between people with different attributes.

キーワード：ごちゃまぜ, 交流実態, 施設運営

Keywords: Gochamaze, Exchange, Facility management

1. 研究の背景と目的

1-1. 研究の背景と位置づけ

近年、地域包括ケアシステムや地域共生社会という考え方が提唱されている。その中でも、富山型デイサービスのような従来の障がい者や高齢者・子供などの対象ごとに縦割りや制度化されたものではなく、「居住」「通所」「宿泊」など複数の福祉サービスを横断して提供する中で、周辺地域に存在するあらゆる資源を活用することで福祉サービス利用者と地域住民が共生し支え合うことを目的とした取り組みが全国で広がっている。今回の研究対象とする輪島 KABULET プロジェクト（以下、輪島 KABULET）も、横断的な福祉サービスに加え、幅広いサービスを展開し、福祉サービス利用者と地域住民が交わり・支え合う地域社会の形成を目指す事例である。

複合的な福祉施設に関する研究では、これまでも富山型デイサービスを対象とし、空間構成を分析するとともに高齢者・障がい者・児童など利用者のかかわりに関する研

究¹⁾や幼老複合施設における建物配置と異世代交流に関する研究²⁾は行われて来たが、輪島 KABULET は施設全体が就労支援としての役割を持ち、障がい者・高齢者・子供に非福祉サービス利用者と幅広い利用者が存在し、運営者においても運営法人の従業員以外に就労支援 A 型 B 型やボランティアが関わることで、利用者・運営者両方での多様な交流の在り方を分析できると考える。また輪島 KABULET に注目した研究では、施設設計者自身によって輪島 KABULET を含めた佛子園の 3 施設における設計手法の研究^{3) 4)}が行われた。

1-2. 研究の目的

本プロジェクトの特徴は、施設全体が就労支援の場としての役割を持つことである。これにより社会福祉法人である運営主体佛子園は、デイサービスやサ高住、障がい者グループホームなどの福祉サービスに加え、河井地区内やその周辺に温泉施設やウェルネス施設、宿泊施設、食事処、住民自治室、カフェなど複数のサービスを障がい者のための就

*1 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻、博士前期課程

*2 神戸大学大学院工学研究科、教授、博士（工学）

*3 神戸大学大学院工学研究科、助教、博士（工学）

Graduate Student, Graduate School of Eng., Kobe Univ.

Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr. Eng.

Assistant Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr. Eng.

労支援の場として展開している。

また、障がい者が隔離された環境ではなく、地域の中で多くの人と交流しながら人が集まる場を複数展開することで、輪島市内の住民から県外からの観光客まで幅広い利用者が集まり、従来の福祉施設では関わることの少なかった多様な属性を持つ利用者、運営者間での交流が多く見られる。

そこで本研究はヒアリングと先行研究から整理した建築設計・施設運営の特徴を分析項目の一つと位置づけ、属性ごとに分類した利用者での交流事例を目的・場所・内容・建築設計的特徴・施設運営の特徴の観点から分析することで、建築設計・施設運営の特徴と多様な属性間での交流における関係性を明らかにすることを目的とする。

2.研究方法

本研究では、利用者・運営者・設計者へのヒアリング調査で得られた情報を基に、輪島 KABULET 内の交流実態を分析する。表 1 に概要を示す。

ヒアリング調査では、開所から一か月後の 2018 年 5 月時点で、当時の施設長と設計者から、輪島 KABULET の運営や設計における基本的な考え方・仕組みについて聞き、次に 2019 年 11 月には、各施設の責任者である佛子園職員とパート職員など計 7 名から、施設従業員数から利用者の具体的なプログラムなどを把握した。さらに 11 月 19 日（火）～21 日（木）の観察調査では、施設の営業時間内である 11 時～22 時の中で施設全体を巡回し、複数の施設での交流現場を観察し、施設利用の目的や経緯、交流の実例などの聞き取りを行った。また本事業所を設計した五井建築研究所代表の西川氏へのヒアリングにより、輪島 KABULET における建築設計手法の特徴と設計プロセスを把握した。

3.輪島 KABULET の交流を誘発する手法

輪島 KABULET 内での交流事例において、建築設計と施設運営における手法・特徴から交流が発生する要因を分析するために、設計者と施設運営者へ行ったヒアリングを行った。

3-1.施設概要

調査対象プロジェクトは石川県輪島市河井地区に複数の福祉施設と温泉やウェルネスなどの非福祉施設を展開する輪島 KABULET である。表 2 にプロジェクト概要を示し

表 1：調査概要

時期	対象	方法	目的	項目
2018.5	施設長 設計者（現場）	ヒアリング	施設運営・設計に関する基本的な考え方の把握	・施設運営における理念や特徴 ・施設開所の大まかな流れ ・今後の施設運営の見通し
2019.11	施設マネージャー やその他職員 7 名	ヒアリング	詳細な施設運営の特徴の把握	・施設従業員数 ・近隣施設との棲み分け ・具体的なプログラム ・利用者像
	各施設利用者	観察調査	施設内での利用者間交流実態の調査	・利用者、運営者間での交流実態 ・利用者属性・利用目的、利用経緯
2019.12	施設設計者（代表）	ヒアリング	建築設計手法の特徴の把握	・建築設計的特徴 ・設計プロセス

表 2：プロジェクト・施設概要

プロジェクト名称	輪島 KABULET
所在地	石川県輪島市河井地区
開所年月	2018 年 4 月
延べ床面積	拠点施設：881 m ² ウェルネス：312 m ² ママカフェ：134 m ² 高齢者デイ：89 m ² サ高住：386 m ² グループホーム：170 m ²
提供サービス	高齢者デイサービス（通所）・障がい者生活介護（通所）・サ高住障がい者グループホーム・放課後等デイサービス・配食サービス 温泉施設・食事処・住民自治室・ウェルネス（ジム施設）・カフェ 宿泊施設・イベントホール
職員構成 （2019 年 11 月時点）	正職員：14 名（内 JOCA5 名） パート：32 名 アルバイト：5 名 就労支援：A 型 34 名

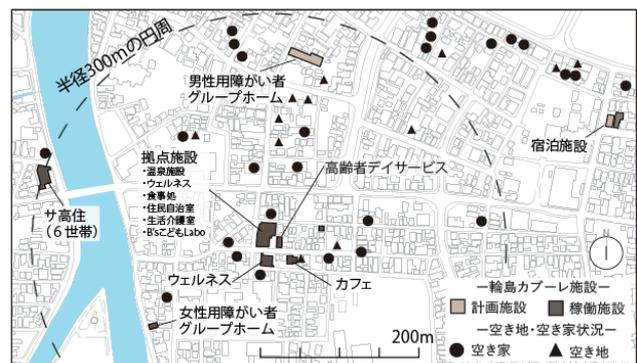


図 1：河井地区の空き地・空き家と施設分布図

た。輪島 KABULET は輪島市の中心市街地河井地区二拠点施設から半径 300m 以内に複数の施設を 2018 年 4 月より展開する（図 1）。これらの施設は全てが空き家もしくは空き地を活用して建てられたものであり、拠点施設を除き、およそ 100 m²～300 m²と小規模で河井地区内に分散配置されている。このプロジェクトは、障がい者を始めとして、高齢者・子どもまで幅広い福祉サービスと温泉施設や食事処、ウェルネスにカフェ・宿泊施設など、福祉サービスを利用しない人でも集まることの出来る、空洞化した市街地での拠点としての役割を担っている。

3-2.建築設計の特徴

設計者である西川の研究^{3,4)}によると、輪島 KABULET における設計手法は「空間の相互間入」「空間の透過性」「動線の複層化」の三つが挙げられる。「空間の相互間入」と「空間の透過性」は、施設の内外や機能による空間の境界部を縁側の設置やファサードのガラス戸、ブレース架構によって、

空間を変えて仕切らずに他者の存在を確認しやすくする手法である。「動線の複層化」は、施設が面する通りも含めて複数の機能動線を意図的に重ねることで、別の目的で来た施設利用者や運営者があいさつや顔を合わせる機会を多く設けるための手法である。またこの動線周りに縁側や足湯、休憩スペースがあることで、動線上で出会い、そのままその場で滞留・会話を行うこともできる。

3-3. 施設運営の特徴

3-3-1. 利用者による複数機能の横断

輪島KABULETは、高齢者デイ・障がい者生活介護利用者へのプログラムの一環としてのウェルネスや温泉・食事処の利用を取り入れている。また、ウェルネス会員は温泉施設を無料で使えるようになることで、ウェルネスで運動後そのまま温泉施設へ行く利用者が良く見られる。このように利用者が複数のサービスを横断し、施設内の移動を促進させる仕組み作りを行うことで、施設内での利用者同士の接点づくりを行っている。

3-3-2. 運営者による複数施設の兼任

佛子園の職員とパートタイムでの従業員は、複数の施設を兼任しながら働く仕組みを取っている。これにより、それぞれの職員と複数施設の利用者との人間関係が構築され、職員を通じて利用者同士の交流に発展する機会が見られる。

具体的にはサ高住と高齢者デイを兼任した職員の提案で両サービスの利用者が集まって BBQ を行うなど、複数の施設利用者を巻き込んだ交流イベントの企画なども積極的に行う。

4. 施設利用者と運営者の属性分類

4-1. 利用者の属性分類

利用者の分類としては、福祉サービス利用者とは福祉サービス

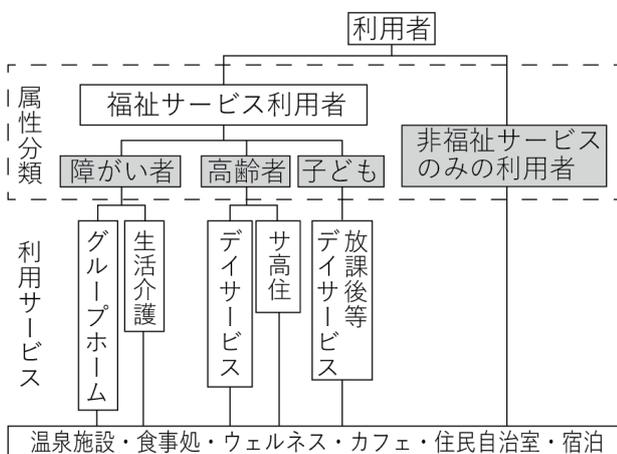


図2：利用者の属性分類図

サービスのみの利用者（以下、非福祉サービス利用者）にて分類することで、輪島KABULETの特徴である福祉サービス利用者との交流実態を明らかにする。さらに、福祉サービス利用者は利用目的ごとにグループホーム・生活介護を利用する障がい者、デイサービスやサ高住を利用する高齢者、放課後等デイサービスを利用する小学生以下の子どもと分類する。以上の事を図2にて示す。

これにより、福祉サービス毎のプログラムや活動場所における建築設計的特徴の観点から分析を行うことで、対象施設の特徴である福祉サービス利用者と地域住民による交流と建築設計・施設運営の関係性の考察を行う。

4-2. 運営者の属性分類

輪島KABULETは従業員として契約する佛子園職員・パート・アルバイトのほか、就労支援A・B型や個人・企業ボランティアと協力しながら運営されている。就労支援A型は主に食事処やウェルネス・宿泊施設の接客・掃除などを行う。就労支援B型はカフェにて内職などの軽作業や高齢者デイサービスで作業補助などを行う。ボランティアは普段利用者として施設を訪れる人にイベント時の設営や裏方仕事などを個人的にお願いする場合や夏休みを利用して近隣の大学生が施設内で子供に勉強を教えることがある。

5. 施設内における交流実態の分析

5章では、4章で分類した利用者属性ごとに交流を整理する。そして、それらを拠点施設の配置図にプロットすることで、交流分布を分析する。さらに、利用者における同じ属性間での交流事例を2つ、異なる属性間での交流事例を4つ取り上げ、より具体的に建築設計の特徴と共に分析を行った。

5-1. 交流事例の抽出プロセス

本研究では、同じ空間にいることや相手の事を一方的に認識するのではなく、挨拶や会話、活動など他者と直接的に関わる行為について「交流」と定義する。

そして、現地での観察調査と利用者・運営者へのヒアリングから得られた交流の中から交流人物の属性・交流場所・活動内容において重複したものを省いた36事例を抽出した。内訳としては利用者の同じ属性間での交流が13事例・利用者の異なる属性間での交流が12事例・運営者と利用者間での交流が11事例である。

以降は抽出した交流事例において、交流主体の属性・交流分布・交流内容の分類に加え、建築設計と施設運営の特徴がそれらの交流にどのようなかわりを持っているのかを、分析する。

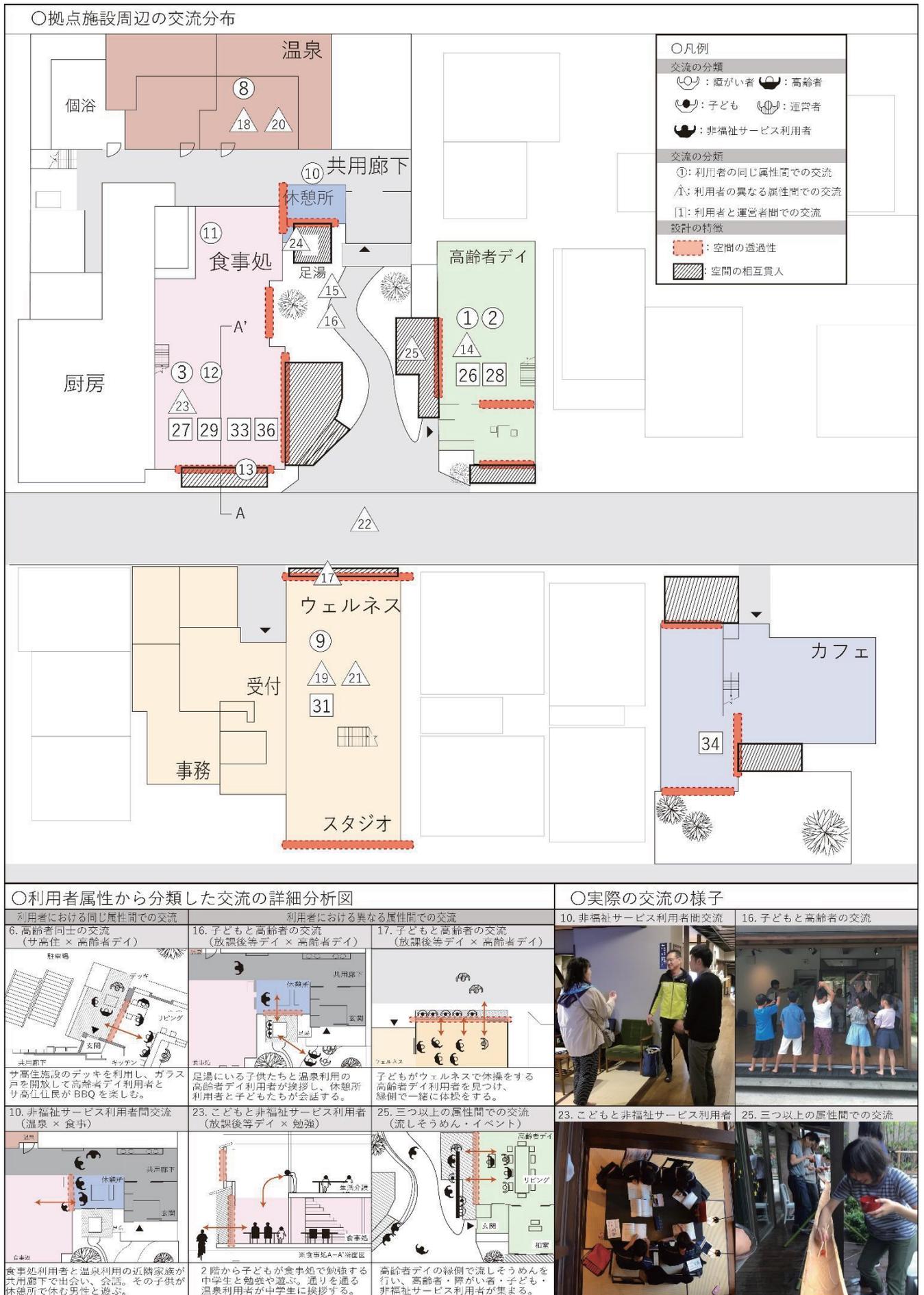


図3：拠点施設周辺の交流分布と交流の詳細分析図

5-2.利用者における同じ属性間での交流 (表 3)

5-2-1.福祉サービス利用者との同じ属性間での交流

・高齢者同士の交流

高齢者デイサービス利用者は、日中は会話や塗り絵などをデイサービス施設内で楽しむ場面や(事例 2)、デイサービスのプログラムとして隣接するウェルネスや温泉施設、食事処の利用が見られた(事例 3)。サ高住利用者の食事は輪島 KABULET が用意したものを見守り員であるパートが簡単な調理を行ったうえで共用リビングにて提供されるので、ご飯の時間になるとサ高住利用者の全員が共用リビングに集まり、食事を食べながら談笑する場面が見られた(事例 4)。また一部の利用者で毎週リビングの一角に集まり、編み物や手芸などを行いながら会話する場面も見られた(事例 5)。また、現在のサ高住担当職員が以前高齢者デイを担当していたことから、サ高住利用者と高齢者デイ利用者がサ高住の玄関にあるデッキを使って BBQ を行ったこともあるとのことだった(事例 6)。その際は、サ高住の玄関横ガラス戸を開放することによって、リビングとデッキを一体にして楽しんだとのことだった。

5-2-2.非福祉サービス利用者同士の交流

非福祉サービス利用者の多くは、温泉施設や食事処、ウェルネスなど特定の施設を訪れ、その中で交流する場面が多く見られた。特に温泉が無料で利用できる 7 区 11 区に住む利用者は毎日温泉施設に来る人もおり、ここに来れば昔なじみの友人に会えると話す利用者もいた(事例 8)。また、ウェルネス会員も温泉施設が無料で利用できるため、輪島市内に住む男性のウェルネス会員はレッスンを受け、そのまま友人たちと温泉施設を利用するルーティーンを持っていた。さらにその男性に話を聞いている際に、拠点施設内の共用廊下でよく出会うという無料世帯の家族と談笑したり、子どもと遊ぶ場面が見られた(事例 10)。拠点施設の共用廊下は施設利用者が必ず通る道であり、通りに設置された休

憩所は食事処と壁で仕切られておらず、木造のブレースの間を子供たちが通り抜けて遊ぶ姿も見られた。このようにウェルネスから温泉施設までの機能横断を会員特典とすることで、無料世帯の温泉利用者と市内から訪れたウェルネス会員が交流するきっかけを作っている。

また、食事処では食事以外の利用も許可し開放しているため、学校帰りに複数人で勉強をしに来る中学生の姿も見られた(事例 12)。彼らは机といすが設置された通りに近い場所で勉強をしていたため、ガラス戸越しに拠点施設を訪れた近隣の知り合いから声を掛けられる場面も見られた(事例 13)。

5-2-3.小括

高齢者同士の交流において、通常時で生活する施設が異なる高齢者デイとサ高住利用者での交流事例 6 である BBQ では、両施設を兼任した運営者の存在とデッキからリビングまでを繋げる建築設計の特徴により生まれた非日常の交流であった。また、非福祉サービス利用者における同じ属性間での交流は、ウェルネスを終えた温泉施設利用者と食事を終えた食事処利用者、さらに温泉終わりに休憩所で休む人などが頻繁に行き来する共用廊下での交流がよく見られた。

5-3.利用者における異なる属性間での交流 (表 4)

5-3-1.福祉サービス利用者の異なる属性間での交流

①障がい者・高齢者と子どもでの交流

高齢者デイと生活介護の障害者は共に行動するため、障がい者も温泉施設や食事処を訪れることが多くある。そこで、拠点施設の玄関横にある足湯へ入っていた子どもたちが高齢者と障がい者へあいさつする場面が見られた(事例 15.16)。この足湯は共用廊下に設置された休憩所のガラス戸から入るよう設置されているため、足湯に入る際や入った後も休憩所利用者と子どもとの交流も見られた(事例 24)。このように外から施設内に入る利用者と休憩所にいる利用者両方の視界に入る場所で、かつ外部の通りと内部の共用

表 3：利用者における同じ属性間での交流分析

交流属性	利用目的	交流場所	交流内容	建築設計的特徴	施設運営的特徴	
福祉サービス利用者	1 障がい者	生活介護	デイサービス	会話・塗り絵などの作業	————	————
	高齢者	2 高齢者デイ	デイサービス	会話・塗り絵などの作業	————	————
		3 高齢者デイ	食事処	食事	————	————
		4 サ高住	サ高住リビング	会話・食事	————	————
		5 サ高住	サ高住リビング	編み物や工作などの手芸	————	————
		6 イベント(サ高住とデイ利用者の懇親会)	サ高住駐車場	BBQ	空間の透過性 空間の相互開入	運営者の施設兼任
	子ども	7 放課後等デイ	拠点施設二階	————	————	
非福祉サービス利用者	8 温泉施設	脱衣所・浴室	入浴・会話	————	————	
	9 ウェルネス	ウェルネス	レッスン・会話	————	————	
	10 温泉&食事	拠点施設の共用廊下	会話	動線の複層化	利用者の機能横断	
	11 食事	食事処	会話・食事	————	————	
	12 食事処での勉強	食事処	勉強	————	————	
	13 勉強と温泉利用	食事処の縁側	挨拶	空間の透過性	————	

社サービス利用者両方が非福祉サービス施設を利用するようなプログラムを組むことで、より集中的に非福祉サービス施設を多様な属性の利用者が利用することで、交流のきっかけを設けている。具体的には高齢者デイ利用者のプログラムとして、ウェルネス・温泉利用・食事処利用に加え、ウェルネス会員の温泉無料・7区11区の近隣住民の温泉無料などである。

建築設計の観点においても、最も人が集中する玄関から温泉までを繋ぐ一階の共用廊下周辺に滞留空間の足湯・休憩所・食事処の入り口など複数のスペースを設け、ガラス戸やブレースによってそれらを繋ぐことで一体的な空間利用が出来るようになっている。

また、例外的に運営者が施設を兼任していることで出来た関係性から、福祉サービス施設においてBBQや流しそめんのような複数の利用者属性が関わる交流もあるが、その場合もガラス戸を開放し、縁側やデッキ空間を室内と一体的に利用することが出来ていた。

5-4. 運営者と利用者間での交流 (表5)

輪島 KABULET では、職員やパート・アルバイトのように従業員として運営に関わるほかに、障がい者の就労支援A型B型やボランティアとして運営に関わることがある。

5-4-1. 就労支援と利用者間での交流

① 就労支援と障がい者・高齢者での交流

就労支援B型の女性が一人、高齢者デイと生活介護で就労支援を行っている。交流内容としては高齢者デイや障がい者生活介護の利用者と会話を楽しむ場面や、作業補助を行う場面が見られた(事例26.28)。

また、生活介護利用の障がい者と高齢者デイ利用者が食事処に訪れた際に、就労支援A型として働く障がい者と注文や配膳を通して交流している姿も見られた(事例27.29)。

② 就労支援と子どもでの交流

前述の通り、食事処には障がい者が就労支援A型として配膳や接客業務に就いている。彼らは食事処の注文など受け取る必要があることから、共用廊下に近いカウンターに居ることが多く見られる。その際に、学校から帰ってきた放課

後等デイの子どもが二階のB'SこどもLaboや生活介護室、住民自治室で遊ぶために共用廊下を走りながら、カウンターにいる就労支援者に挨拶をする場面が見られた(事例30)。つまり、共用廊下が拠点施設を利用する人が必ず通る動線となっており、さらに共用廊下から食事処には扉や仕切りが無いことによって、内部空間の透過性が高く、それにより食事処を利用しない子供もカウンターにいた就労支援の障がい者と交流が生まれた事例である。

③ 就労支援者と非福祉サービス利用者間での交流

輪島 KABULET では食事処以外に、就労支援A型としてウェルネス施設と配食センターでの就業が設けられている。ウェルネスで働く男性はウェルネスの受付から一人でレッスンまで行う中で、利用者とは会話を交わしていた(事例31)。さらに、ウェルネス職員によると、ウェルネスが他の福祉施設への出張サービスを行う際に、彼も同行し、レッスンを行うことがあるとのことであった(事例32)。

また、就労支援B型の障がい者がカフェで内職を行っている際に、カフェ利用者が障がい者へ挨拶を行う場面が見られた(事例34)。カフェは通りに面した前後両方がガラス戸のファサードとなっているため、前後の通りから中に誰がいるのかが分かるようになっている。

5-4-2. ボランティアと利用者間での交流

輪島 KABULET では利用者がボランティアとしてイベント時の運営補助や施設内で活動することがある。

ウェルネス会員からイベントのボランティアとして関わった男性の例では、利用者から運営に関わることでそれまで関わることの無かった他施設の利用者との接点生まれ、より人間関係が広まったとのことである(事例35)。さらに、その男性はイベント等を重ねていくことで施設利用者の顔見知りが増え、普段の利用時にも食事処や共有廊下で知り合いに出会うことが多くなり、普段の施設利用においても楽しいと話していた。

5-4-3. 小括

就労支援を利用する障がい者は他の輪島 KABULET 職員のように複数の施設を移動することはなく、食事処やウェ

表5：利用者と運営者での交流分析

	交流属性	利用目的	交流場所	交流内容	建築設計の特徴	施設運営の特徴
就労支援者と利用者間	就労支援者と障がい者	26 高齢者デイ	デイサービス	会話・作業補助	—	—
		27 食事	食事処	配膳・会話	—	—
	就労支援者と高齢者	28 生活介護	デイサービス	会話・作業補助	—	—
		29 食事	食事処	配膳・会話	—	—
	就労と子ども	30 放課後等デイ	食事処	挨拶・会話	空間の透過性・動線の複層化	—
		31 ウェルネス	ウェルネス	レッスン	—	—
	就労支援者と非福祉利用者	32 ウェルネス(出張)	施設外	レッスン	—	—
		33 食事	食事処	配膳・会話	—	—
		34 軽作業	カフェ	挨拶	空間の透過性	—
		35 イベント補助	不明	イベント企画・補助	動線の複層化	利用者の機能横断
ボランティアと利用者間	36 勉強を教える	食事処	勉強	—	—	

ルネスなど一施設内でのみ就労をすることから、複数施設での交流は見られなかった。しかし、食事処での就労において、カウンターにいても施設内を走っている子供とあいさつをすることで、食事処の利用者以外の交流が見られた。また、これにより、輪島 KABULET では、就労支援を利用する障がい者が施設内を移動することは少ないが、他の施設を利用するために訪れた利用者が共用廊下をすることで、就労支援利用者も多様な属性の利用者との交流が生まれる可能性があることが分かった。

また、普段は利用者である人が、ボランティアとして運営者の立場になることで、一時的にこれまで関わることの無かった利用者との交流するきっかけとなっていることが分かった。さらに、ボランティアから利用者に戻った後に、共用廊下や各施設で顔を合わせることでより深い人間関係に繋がることが分かった。

6. まとめ

本研究では、ヒアリング調査によって対象施設の概要と建築設計・施設運営における特徴を把握し、現地での観察調査から得られた交流実態を属性別に分類することによって以下のことが分かった。

1) 輪島 KABULET のあらゆるところで福祉サービス利用者と非福祉サービス利用者間での交流が生まれているのではなく、福祉サービス施設では福祉サービス利用者同士の交流が主であり、非福祉サービス利用者に関わる交流は主に非福祉サービス施設で行われていることが分かった。

さらに施設運営の観点では、高齢者デイで見られたプログラムとして福祉サービス利用者が温泉処やウェルネスなどの非福祉サービス施設を利用することが多くあった。そして、非福祉サービス施設に多様な属性の利用者を集中させたうえで、建築設計によって集中し得る玄関と温泉を繋ぐ共有廊下に複数の滞留スペースとそれを繋ぐ境界部のデザインを行っていた。

2) 例外的に運営者が施設を兼任していることで出来た関係性から、福祉サービス施設において BBQ や流しそうめんのような複数の利用者属性に関わる交流もあるが、その場合もガラス戸を開放し、縁側やデッキ空間を室内と一体的に利用することが出来ていた。

3) 輪島 KABULET では、就労支援を利用する障がい者は一つ施設内で働くため、施設内を移動することによる交流は少ないが、他の施設を利用するために訪れた利用者が共用廊下をすることで、就労支援利用者も多様な属性の利用者との交流が生まれる可能性があることが分かった。

謝辞

本研究の調査にあたり、ヒアリング調査にご協力いただいた輪島 KABULET 利用者、職員、五井建築研究所所員の皆様に御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 江文菁, 佃悠, 藤井容子, 岡本和彦, 西出和彦, (2012) 富山型デイサービスにおける空間構成と利用者のかかわりに関する研究 地域共生ケアホームに関する研究, 日本建築学会計画系論文 No. 675, 987-994
 - 2) 宮崎文夏, 山田あすか, 古賀蒼章, (2016) 幼老複合施設における建物配置と異世代交流に関する研究-埼玉の幼老複合施設を対象として-日本建築学会地域施設計画小委員会地域施設計画研究 34
 - 3) 西川英治, 山崎寿一, 今井貴俊, (2019) 輪島 KABULET の設計理念・手法とその評価-「ごちゃまぜ」理論に基づいた地域コミュニティ再生-, 日本建築学会住宅系研究報告論文集 14, 89-98
 - 4) 西川英治 (2020), 「地域居住福祉施設群の建築設計に関する実践的研究-ごちゃまぜ理念に基づく地域コミュニティ再生プロジェクト Share金沢・B's 行善寺・輪島カブーレの事例から-」神戸大学大学院工学研究科博士論文
 - 5) 園田真理子 (2018), 「ごちゃまぜ」をめざして、地域で経済が循環するまちづくりの可能性-超少子高齢化、人口・世帯減少、プレAI 期における後退戦への臨み方、日本都市計画学会第 330 号、
 - 6) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 内閣府地方創生推進事務局「まち・ひと・しごと創生基本方針 2019」(令和元年 6 月 21 日閣議決定)
- <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/info/pdf/r01-06-21-kihonhousin2019hontai.pdf>